

時の知覚

—新宿に流れる時を他者と共有し、再編する—

22019008 加藤 夢梨
指導教員 宮 晶子 教授

時	知覚	周期
連続	混在	断絶

1. 制作の背景と目的

日々を過ごしていく中で、時の感じ方は様々である。物事に追われて忙しく過ごしているときはあっという間に時が過ぎていくが、何か物事を待っている間や、退屈なときはゆっくりと時が過ぎていく。速度の違いだけでなく、密度の濃い時間や多くの経験を得られた時間、内容の薄い疎な時間など多種多様な時の積み重ねにより毎日が成り立っている。しかし、多様な時は振り返れば実感できるものの、過ごしているその瞬間に感じることは難しい。また、他人がどのような時を過ごしているのか、過去にどのような時を過ごしてきたのかを感じ取ることはできない。そこで、今自分がどんな時を過ごしているのか、過去にどんな時を過ごしていたのかを感じたり、これからどんな時を過ごしていくのかを想像することで、無意識に過ごしていた毎日に様々な要素を見つけることができる。これを時を知覚と言うこととする。他人が過ごす時を感じ、お互いに共有していくことでさらに自分の時の知覚を深めていく。

2. 時の情報量

時の流れに対して、経過が早い、遅いと感じる時の違いについて、一川誠著『大人の時間はなぜ短いのか』では、「人間の注意の容量は有限であり、同時に多数の事象に注意を向けることはできない。」と述べられている。通常4つ程度までの対象であれば同時に注意を向けてそれぞれがどのように動き回るかを追いかけることができる。しかし、追いかけるべき対象が5つを超えると途端に注意を向けて追いかけることができなくなる。有限な容量の中で、ある1つの出来事で容量を占領することで、他の事象に注意を向ける頻度が落ちる。その結果、時間の経過に対して注意を向けなくなり、経過が早く感じる。やるべきことに追われていると、どんどんと時が経ってしまう。雑多な環境にいと、頭の中がなかなか整理されずに気がついたら時が経ってしまう。

逆に、情報量が少ないと時の流れは遅くなっていく。時の経過に対して多くの意識が向くことで、時の経過を強く感じる。大きな自然の中で、穏やかな音や日の光を感じながら過ごすことは、ゆったりとした時を過ごすこ

との代表例である。視覚、聴覚、触覚などを使い、この情報量の操作を行なっていくことで時の流れの感じ方を変化させていく。

同じ時計の1時間という時間の中でも、それぞれが過ごしている周辺環境、行動、経験によってその中身は大きく変わる。

3. 時の周期

日常生活において、時の流れは繰り返しである。時の流れに緩急はあるものの、その波が繰り返されて日々が出来上がっている。過去の経験との比較などが、時の知覚に大きく影響してくるためである。情報が繰り返されることで、時の周期が完成する。時の周期を、情報の連続、情報の混在、情報の断絶の3つに分類する。(図1)

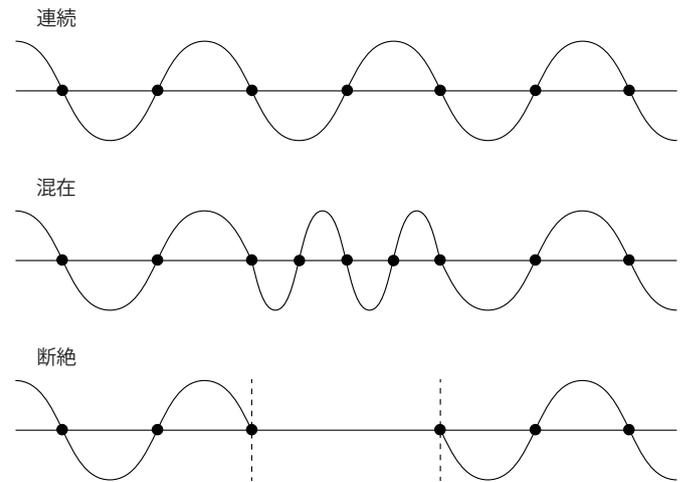


図1

第一に連続とは、過去との対比がしやすく流れを持った時の流れである。一定の流れを持ち、同じことを繰り返すことで、時の流れに対してあまり意識が向かず、他者との関係もあまり感じることはできない。

第二に混在とは、一定の流れの中に違った情報が一度混在することで情報の取捨選択が行われ、流れを変化させることができる。自ら時の流れを作ることによって、自分がどのような時の流れにいるのかを知覚しやすくなる。また、他人が感じている時の流れが変化したことに対し、他者からも認識しやすくなる。

第三に断絶とは、継続していた情報量が一度0になることにより、同じ情報の連続でも新たな視点で再認識することができる。また、断絶された後の情報が全く連続性がなく違ったものであった場合でも、一度リセットを挟んでいることにより自らその間を補正し、関係を意識させることができる。

上記にある情報とは、視覚、聴覚、触覚を指す。認識する情報量の変化を感じることが、時の流れの変化を感じ他者との時間の共有をしていくこととなる。

4. 時の知覚と空間

時の流れを知覚することと、空間の関係性について情報量の変化を用いて分析する。同じ空間の中に、より多くの情報が錯綜することで慌ただしい時を感じ、速く流れる時を知覚する。

平坦で一定の人の流れに乗って歩行する場所では情報の連続を感じ、傾斜がある場所では歩行速度に変化をもたらし情報の混在を感じる。全く違う場所を、あえて一度分断し情報をリセットすることで自然な切り替えを作り断絶から連続へと繋げる。同じ場所であったとしても、断絶を用いて情報のリセットを行うことで新たな視点を生ませることができる。

5. 他者との時の共有

他者を視覚的に認識することで同じ時を過ごしていることを感じさせ、お互いの時の知覚をさらに加速させる。自分と他者の比較を行うと、客観的に自分を見ることができる。また、他人と同じ時を共有することで他者との関わりを持つことができると考える。

6. 設計提案

自分の過ごす時の流れを知覚し、今どのような時の中に存在しているのかを自覚する。そして、他者と時の流れを共有することでさらに自分の時を知覚する空間を設計する。

6-1. 対象敷地

敷地は、JR 新宿駅東口駅前広場と西武新宿駅PePe 前広場、そしてその2つの広場を結ぶ新宿通り周辺とする(図 2)。現在JR 新宿駅東口と西武新宿駅の間では、主に Moa 2 番街という店舗が立ち並



図 2

ぶ通りが通行に利用されている。しかし、横断歩道が直接西武新宿駅前に繋がっておらず、多くの人が道路に溜まり、流れが滞っている現状である。

6-2. プログラム

新宿駅は、世界中から多くの人が集まる場所であるにも関わらず人同士の交流はあまり無く、お互いが存在を認識しながらも干渉せず個々が孤立している。新宿には中心となる場所がなく時の流れが感じられず、滞留した時があちこちに分散している状態である。人の流れが滞留し、お互いが近い距離にいらながらも孤立しがちなこの場所に、会話などを交わす直接的な干渉がなくとも他者を認識し、お互いに時の流れを共有する場所を設計する。

6-3. 設計手法

情報の連続、混在、断絶を用いて2つの広場内で時の共有を行う。高低差や俯瞰で他者の認識を行い、駅と街の間をつなぐポイントとする。そして、2つの広場を繋ぐ形で線路沿いに通路を設ける。線路沿いで、電車に乗車中の人を見ることは、歩く速度と電車の速度の違いによりお互いが違う時を過ごしていることを知覚させる。そして、その違いを感じながら2つの広場を行き来することが断絶を生み広場同士を繋げていく。(図 3)

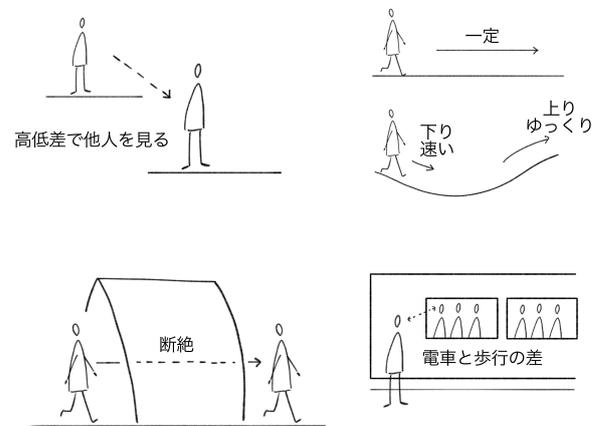


図 3

様々な情報量の中で時の知覚を行い、東口駅前広場と西武新宿駅前広場のそれぞれの時を繋ぐ。それがひいては南口や西口と線路を通して繋がり、新宿全体の時を再編することを期待している。

*主要参考文献

一川誠『大人の時間はなぜ短いのか』